

### 事務局だより

#### 会員数 (2026年2月1日現在)

地域	湘南	県央	ベイサイド	多摩・田園	全体
会員数	37名	31名	28名	28名	124名

Eグループ会員は会員数124名のうち114名。

入退会：なし

#### 5月24日(日)、オルタ館にて第35回通常総会を開催します

総会は、地域じゃおを超えて会員が交流できる数少ない機会です。顔を合わせて語り合いましょう。ぜひ多くの会員の皆様にご出席・ご審議をいただき、会員相互の交流を深めていただければ幸いです。

総会終了後には、会費制にてささやかな懇親会を行う予定です。



#### 次回の運営委員会とHPサークル

運営委員会：2026年3月15日(日) 10:00~12:00 (オンライン開催)

議長：高橋委員 書記：竹内委員

HPサークル：2026年4月26日(日) 15:30~17:00 (オンライン開催)

議長：竹内委員

### 会員だより

#### 移住の記ーその7

佐賀県小城(おぎ)市小城町 (県央) 前田康行

今住んでいる小城市の市民活動発表会というものに行ってみました。「小城市市民活動ガイドブック」によると50の団体が登録しているようで、そのうち数団体の代表の方がスライドを使って活動内容を発表していました。中には若い方が活動の中心となっている団体もありましたが、たいていは中高年、それも女性の方が多い印象でしたね。

発表会の後、活動している人や発表会に来てた一般市民を交えて地域活性化シンポジウムが開かれ、テーブルごとに分かれてブレインストーミング方式で地域起こしのアイデアを出していくといった作業

がありました。

多かったのは、空き家をリノベーションして古民家カフェやら民宿に、なんていうアイデア。田舎の活性化として、よく出てくる話だと思います。まあしかし、これまたよく聞くのは、最初は興味を持たれて人が集まるんだけど、持続するとなるとなかなか厳しいというのが現実のようです。

それに、ご多分に漏れず我が小城市も人口減少が続いていて、若い人が少なく中高年者ばかりです。だから、次世代がいなければそもそも継続することができません。とまあ、あれこれ考えてみるに、これといって特色のない一地方の町起こしになにか決定的な策なんてあるのだろうかと思直に思います。起死回生の手なんてあるのかなあ。

我が小城市は県庁所在地である佐賀市の隣に位置していて、地価も佐賀市より安いということで佐賀市のベッドタウン的な捉えられ方をしているようで、このご時世に、あちこちで宅地造成が行われており、実際に世帯数も増えてます。

ただ、不思議なことに、世帯数は増えているのに人口は減っているという現象が起こっています。世帯数の増加は単身世帯、特に若者用のアパートとかが増えていること、人口の減少は世帯からの同居者（若者でしょうね）転出や高齢者の死亡などが要因ということで説明できるようです。

いずれにしてもこのところ一貫して人口減少が続いているのですが、それは小城市に限らず佐賀県全体としてもそうなので、一地方自治体がいくら頑張っても結局他地域の人を奪うことになるだけじゃないですかね。

というわけで、地方における市民活動もある面では地域おこしであり、ひいては人口減を食い止めるというか、人を増やすことにつながるという期待が込められているんでしょうが、人口減の流れは日本全体におよぶ話で、もはやどうしようもないわけじゃないですか。それならよそから人を呼び込むというより、今住んでいる人たちがいかに幸せを感じられる町にするかという視点で市民活動を考えた方がいいんじゃないですかね。

実は、先ほど、市民活動に参加しているのは女性の方が多いと言いましたが、その女性たちに、ご主人はなにをしているんですかって聞いたら、一日中家でテレビを見てるとかっていう答えが多くてびっくり。なんだ、田舎も同じだ、おやじはやっぱり籠ってるんだなあとおつくづく。

なら、じゃおクラブのテーマである「おやじよ外に出よう」をこちらでもやってみようかと思立ちました。ちょうどまい具合に、市の公共施設で主に子供たちの居場所づくり活動をやってる人と知合いになりましたね、大人の居場所づくりもいいですね、ということになりました、とりあえず、パン作り、豚まん作りなんかを始めてます。(写真右)

さて、どうなりますか。



(写真左) 2026年1月、我が家近くから眺めた佐賀県小城市小城町の風景、田圃では麦が芽吹いています、まあ、こんな感じの田舎です。



# じゃお湘南

## 「四木」曾我梅林吟行報告

空は抜けるような青さであった。二月とは思えぬほど澄みきった群青が、どこまでも広がっている。駅を降りると、古びた駅舎の両側に紅白のしだれ梅が咲き誇り、思いがけず華やかな出迎えを受けた。歓迎されているというより、ただ静かにそこにある花の前へ、こちらが歩み寄ったという感じである。

空を見上げて一句口にした。

群青の空より梅のしだれけり

なるほど、と皆がうなずく。俳句というのは、言葉にした途端、景色を一段深くする。

今日は曾我梅林を歩きながらの吟行である。風はほとんど感じられず、あるのかないのか分からぬほどの柔らかさで頬をなでていく。道端には犬ふぐりが小さな青をひらき、側溝を流れる水は軽やかな音を立てていた。早春の景は、目立たぬものほど心に沁みる。

句友が、一句ぽつりとつぶやいた

水温む小さき堰の水の音

途中、犬を連れて散歩する老人に出会った。犬が前を急ぎ、老人がそれに従うように歩いている。散歩というより、犬に引かれているようであった。だがその顔には焦りも疲れもなく、ただ穏やかな光がある。長い年月を過ごしてきた人の、静かな安らぎのようなものを感じた。

曾我の里犬に引かれて梅見かな

句友がまた一句、句にすると少しだけその人の人生に触れた気がする。

梅園では、早くも屋台に寄って酒を手をしている仲間がいた。屋間の酒はどこか後ろめたいはずなのに、梅の花の下では不思議と晴れやかである。気の置けない友と酌み交わす一杯は、ただそれだけで今日という日を十分なものにしてくれる。

梅園の屋台に寄りて梅見酒

いかにも、今日という日をそのまま閉じ込めたような句友の一句だった。

朝にはくっきり見えていた富士山も、いつのまにか春霞に隠れていた。消えたのではなく、向こうへ退いたように見える。薄日が差し、梅の枝がかすかな風に揺れる。その頼りなさが、かえって春の確かさを感じさせる。

句会の披講や講評を終え、帰路の途中でささやかな直会となった。茅ヶ崎の駅近くで酒を酌み交わし、他愛ない話に興じる。紅一点を囲んで笑い声が絶えず、皆どこか少年のような顔つきになっていた。こうして共に歩き、共に言葉を選び、共に飲むことが、歳月の重さをひととき忘れさせてくれるのだろう。

やがて会は自然にほどけ、三々五々家路についた。店をでれば、それぞれの生活へ戻ってゆく。それでも、あの青空や梅の匂い、犬に引かれて歩く老人の姿は、しばらく心に残り続けるに違いない。吟行とは、景色を詠む旅であると同時に、日常へ戻る自分の中に小さな余白を持ち帰る営みなのだと思う。

(湘南 宮澤進 記・安田賢二 写真)

